

自衛隊員期待も不安も

新たな安全保障法制によって海外での活動範囲が広がり、リスクと向まつてなる自衛隊員。安保法をどう見ているのか。

安保法の成立から半日が過ぎた19日午後。陸上自衛隊の拠点が複数ある兵庫県伊丹市内は、いつもの土曜姿はほとんどなく、隊員が運転する輸送車がぱつぱつと敷地内に入つていった。

伊丹駐屯地を含む東海、近畿、北陸、中国、四国地方を管轄するのは

陸自中部方面隊だ。この方面隊管下の駐屯地に勤めたことがある50代の幹部は語り、「安保法は『踏み絵』のようになり、かえって組織は強くなるのではないか」。海外派遣が増えることを覚悟の上で、国民の期待に応えようとする若者が入っていくのも想えてくる。

西日本の海自基地に所属する男性幹部(25)は親から「これからは前線で紛争が起る可能性が低くなる」とも話す。40代の1等海尉も、「すぐに戦争に行くように言われるのは違和感を覚える」と言い。

安保法に対してわき起しつた様々な意見を気にする自衛官も、京都府内に駐屯地に勤める50代の男性自衛官は「大きな決定がある時に反対運動が起きないほうがおかしい」としきりに言つて、「反対の声の大きさは感じる。政府の説明が要領を得ていないことが原因だ」としている。

よりも大変になるかもな。がんばれよ」と励まされた。リスクについて、海で米軍と協力する必要性を指摘する声もあるといふ。この中國幹部は「任務が増えればリスクは高まる」と思つたので、「印上方が高ま
め、護衛艦を派遣している。南シナ海で米軍と協力する必要性を指摘する声もあるといふ。この中國幹部は「任務が増えればリスクは高まる」と思つたので、「印上方が高ま

家族の受け止めはどうか。生後10ヶ月の娘がいる20代の女性は、京都府内の陸自駐屯地に勤める30代隊員の妻。安保法について夫に聞きたが、「アレッシャーに感じない思ふので聞いていません」と話す。

これからどうなる 摺れる家族

夫が近畿の陸自駐屯地に勤める30代の女性は「本音を言えば反対です」と明かす。4人の子がいる。夫の「大丈夫。いままで通りやつていける」という言葉と「リスクが高まる」とする報道との落差に、複雑な気持ちを抱える。香川県善通寺市の陸自善通寺駐屯地で夫が働く30代女性も「辞める人も出てくるのでは」と心配する。